筑波技術大学
産学官連携
シーズ

「９歳の壁」や認知特性に配慮した聴覚障害教育

障害者高等教育研究支援センター・准教授　脇中 起余子

キーワード

「９歳の壁」、日本語指導、認知特性、生活言語、学習言語、口話、手話、日本語、敬語、視覚優位型、同時処理型

研究概要

聴覚障害教育における日本語指導や教科指導のあり方

「９歳の壁」の存在は、聾教育現場でいちはやく指摘されてきたが、非障害児にもみられる現象である。最近、発達検査によって聴覚障害児には「視覚優位型」や「同時処理型」が多いことが明らかにされているが、筆者は、「９歳の壁」は「生活言語」から「学習言語」への移行につまずく現象であり、目に見えるものから離れた抽象的思考が難しいという認知特性と関連する可能性を考えている。

手話に対する理解が広がったが、手話の使用は、高いレベルの日本語や学力の獲得に直結しない。近年、補聴器や人工内耳の進歩により「生活言語」レベルの日本語の獲得に成功したかのように見えても、「学習言語」レベルの日本語の獲得が難しい例が今なお多くみられる。「学習言語」レベルの日本語の獲得のためには、大量の日本語に何回も接する必要があり、そのためには、継次処理が必要な口話の使用も無理のない範囲で必要と考える。また、意味を伝える視覚的言語・手段と日本語を伝える視覚的言語・手段の両方を効果的に組み合わせる必要がある。聴覚障害教育に携わる教員には、「９歳の壁」を越えることの難しさやこの認知特性を考慮に入れた指導ができる力が求められよう。

聴覚障害教育現場では、依然として助詞や敬語の難しさ、長文読解の弱さが指摘されており、助詞については、Webで取り組める助詞問題を開発した。現在、敬語を含む配慮表現に関する教材を検討中である。また、聴覚障害児に多い認知特性を考慮に入れた日本語指導法や教科指導法の詳細な検討が求められることから、筆者のこれまでの聾学校の高等部や中学部における算数・数学指導の工夫例や、筑波技術大学における日本語指導の工夫例をまとめる。また、手話と口話を併用する話によって日本語原文がどこまで聴覚障害学生に正確に伝わっているかを把握し、教育歴などとの関連を分析することにより、日本語の学習言語の獲得のための教育方法の検討につなげる。

応用例・用途

微妙な日本語の手話表現の検討（手話と日本語の間の距離を明らかにし、今後の手話通訳のあり方を検討する）

認知特性を考慮に入れた指導例の収集（視覚優位型・同時処理型の非障害児にも効果的であろう）

日本語を正確に受信できる力の育成のための教育的条件の検討（読話や聴覚活用の習慣の形成が一つのキーワードとなると思われる）

国立大学法人 筑波技術大学　学術･社会貢献推進委員会
【問い合わせ先】
〒305-8520　茨城県つくば市天久保4-3-15　聴覚障害系支援課 学術・社会貢献係
TEL：029-858-9339　FAX：029-858-9335　kenkyo@ad.tsukuba-tech.ac.jp